

因縁の仲の騎士公爵との超絶不本意な結婚

（執拗に抱かれるなんて想定外です!？）

目次

因縁の仲の騎士公爵との超絶不本意な結婚
　　＼執拗に抱かれるなんて想定外です!?!＼

5

番外編 変わらない愛と、育っていく愛

251

番外編 薬師と護衛騎士の不器用な恋

275

因縁の仲の騎士公爵との超絶不本意な結婚

ゝ執拗に抱かれるなんて想定外です!?!ゝ

序章 偉大なる父の遺志

大理石が敷き詰められた高級感のある建物の中は、調度品やカーテンに至るまですべて白で統一されており清潔感が漂う。

王都一の医療施設であるティレット治癒院には、今日も王都中からたくさんの患者が押し寄せていた。

「目を診ますので少し眩しいですよー。上を向いて、次は下を向いて……。はい、次は反対の目です」

パールブラウンの緩くウェーブする髪を一つにまとめ、白衣を身にまとっているのは今年二十四歳になったシャーリー・エヴァンズだ。患部を見つめる桃花色の目は真剣そのものだけれど、目尻が垂れているからか、花びらのような柔らかい印象を与える。

流れるような所作で患者の病状を診察していくシャーリーは、ティレット治癒院の院長を務めている。

ここで働く医師はシャーリーを含めて五人いるけれど、テキパキと患者を捌かなければあつという間に待合室が人で溢れかえってしまうのだ。

「これは目の炎症ですね。昨日はいつもと違うことをしましたか？」

「昨日は布の買い付けで市場へ……」

「では、おそらく埃が原因でしょう。人にうつる病気ではありませんので、いつも通りに過ごしていただいていいですよ。受付で薬をお渡しするので、一日三回使用してください。一週間ほど治ります」

「ああ、良かった、失明したら人生路頭に迷うところでした……。シャーリー先生に診てもらえて助かりました。さすがは元宮廷医師長の娘さんですね！ ありがとうございます！」

「お大事にしてくださいね」

聞き慣れた文言を笑顔で受け流して、シャーリーは次の患者を呼んだ。

ムーアクロフト王国は、五つの公爵家によって支えられている。

攻撃魔法を得意とし、唯一独立した騎士団を持つことを許されたファーカー家。

回復魔法を使い、医師として人々を癒すエヴァンズ家。

代々宰相を務め、優秀な頭脳を持つオールポート家。

多くの文化や言語を理解し、諸外国との外交を担うウォートン家。

王国の金庫の番人という二つ名を持つ、財務大臣を務めるオマリー家。

五大公爵家はその家門にだけ代々受け継がれる特別な魔法があるため、他の貴族よりも一目置かれていた。

シャーリーはその五大公爵家のうちの一つ、医師家系であるエヴァンズ公爵家の娘である。父のホレスは元宮廷医師長で、国王陛下から『星^{ステラ}』の称号を与えられるほどの名医だ。

国に大きく貢献した者にのみ与えられる『星』は大変な名誉であり、娘としても誇らしい。けれどこうしてシャーリーの医師としての期待値が、やたらと上がってしまうのには困っている。

（医療の権威エヴァンズ家の娘とはいえ、私は魔力のない落ちこぼれだから）

エヴァンズ家は回復魔法という特別な魔法を継承しており、親族全員が医療関係の仕事に従事している。兄は父と同じく宮廷医師を務めており、母は心の医者として王国中を回っていた。

ただし、この回復魔法は御伽話^{おとぎばなし}に出てくる女神の力のような、一瞬で傷や病気を治すほどの効力はない。あくまでも人間が本来持っている治癒力を高めてくれるものだった。

万能な魔法ではないけれど、回復魔法を使うのと使わないのでは、完治までにかかる時間が大幅に異なる。医学の技術を最大限に高めてくれるもの——それが回復魔法と言える。

けれど、魔力のないシャーリーには関係のない話だ。一般的な女医として地道に目の前の患者と向き合い、病気や怪我を治すために尽力するしかない。

「先生、ありがとうございます」

「お大事にしてくださいね」

患者を見送り、シャーリーは使用済みの医療器具を消毒液につけた。

「さすがエヴァンズの名は強いですね！ エヴァンズ公爵家が出資して娘のシャーリー先生が院長を務めるこの治癒院が、繁盛しないわけないですもの」

「本当は治癒院が繁盛するのは良くないことだけどね」

シャーリーの助手であるラナは「確かにそうですね」と相槌^{あいづち}を打ちながら、消毒済みの器具をせっせと片付けていく。

ラナ・クロウリーは子爵令嬢という身分ではあるものの薬学に精通しており、ティレット治癒院の開院時から働いてくれている。胸元で切り揃え^{そろ}えられた青灰色の髪に銀色の瞳の、見た目は妖精のように可愛らしい女性だけれど、性格はさっぱりとしていた。

仕事に対して真面目に取り組むラナの勤勉さを買って、シャーリーは治癒院の手伝いをお願いしている。まだ二十歳と若いけれど、仕事のできる優秀な助手だ。

時計の針が正午を過ぎていることを確認して、シャーリーは白衣を脱いだ。

「あとはみんなに任せるわ」

「はい、かしこまりました。本日もお疲れさまでした！」

「お疲れさま」

シャーリーの仕事は基本的に午前中のみ。あとは他の医師たちに治癒院の業務を任せて、午後は主に書類業務を行っていた。

（昨日はお父様の容態があまり芳^{かんば}しくなかったから、心配だわ……）

すでに治癒院のそばに待機していたエヴァンズ公爵家の馬車に乗り、シャーリーは王都の屋敷へ向かった。

仕事の邪魔になるからと一つに結んでいたリボンを解き、パールブラウンの髪がふわりと揺れた。

手櫛で髪を掻き上げると、女医から一気に公爵令嬢モードに切り替わる。

（隣国ハウズで発表された論文がようやく手に入った。解剖学の天才と名高いミキール医師の、腸内細菌に関する研究論文。お父様に読み聞かせてあげたら、きっと喜ぶわ）

現在、エヴァンズ公爵家当主のホレスは床に臥せている。

長年の激務により少しずつ肺に水が溜まり、今では片方の肺が機能していない。ひと月前から話すこともできなくなっている。正直、父の命はそう長くはないだろう。

（少しでも穏やかな最期を迎えられますように）

ムーアクロフト王国では、貴族のほとんどが魔力持ちだ。シャーリーのように生粋の貴族で魔力を持たないのは、非常に珍しいケースである。

しかし家族はそんなシャーリーを粗雑に扱うことなく、たくさんの愛情を注いでくれた。

魔力なしでは良い縁談も望めない。回復魔法を使えなければ、医師として最高峰の地位を得ることもできない。そんな政略的にも能力的にも価値のないシャーリーを、大事に大事に育ててくれた、シャーリーの大好きな家族。

大切な父の命が消えかかっていることを頭では理解しつつも、握り潰されたように心臓が苦しくなる。

今朝は痛み止めの量を増やしたから、そろそろ父の体は限界かもしれない。何があっても覚悟しなければ……

馬車が止まり、シャーリーはぎゅつと唇を噛み締めてタラップを降りた。

「ああ、お嬢様、よくぞお戻りになりました！ 旦那様が……！」

家令の青ざめた顔を見て、シャーリーはマナーも忘れて父の寝室へ走る。

「お父様っ！」

扉を開けると、ベッドのそばにはすでに母のマドリンと兄のデリックの姿があった。

「シャーリー……」

ふたりは父の手を握り、兄は回復魔法をかけていた。

父の病気が治ることはないの、せめて痛みを和らげようとしているのだろう。

「突然呼吸が不規則になって……脈も……弱くなってきた……」

ついにこの日がやってきてしまったのだ。

目を真っ赤にして、必死に言葉を紡ぐ母に寄り添い、シャーリーも父の手を握った。

「お父様、聞こえていますか？ シャーリーです。ここに、おそばにおります」

父の目は閉じられたまま、意識があるかどうかもわからない。けれど言わずにはいられなかった。

「お父様が作ってくれた治癒院で、今日もたくさんの患者を救うことができました。お父様が目指した、身分に関係なく医療を受けられるようにという願いを、私が必ず叶えてみせます。シャーリーはお父様の娘として生まれてきて、とても幸せです。お父様、ありがとう。大好きなお父様……っ」

声が震える。今にも涙腺が緩んでしまいそうだ。言いたいことはもっとたくさんあったはずなの

に、ありがとうと大好き以外の言葉が浮かばない。

シャーリーの声が届いたのか、父の指がほんの少し動いた。

「父さん、エヴァンズ家は僕に任せて。立派に父さんのような宮廷医師になるよ。だから安心して」

「ホレス、愛してるわ……っ」

兄と母が口々に父へ言葉をかけると、一瞬、父の瞼がピクリと震えた。その瞬間、呼吸の音が止まる。

シャーリーの桃花色の瞳から、とめどなく大粒の涙がこぼれ落ちた。

「ありがとう……ありがとう、お父様……」

——ホレス・エヴァンズ、享年五十歳。

王国内で最も優秀な回復魔法の使い手である名医は、家族に看取られて穏やかに天国へと旅立った。

死期が近いことはわかっていたので、事前準備は済ませてあった。父の葬儀、埋葬は速やかに執り行われた。家族葬にしてほしいという父の願いで、こぢんまりとしたささやかな式だ。

「お父様、どうかこれからも天国で見守っていてください」

最後に父の頬に触れる。そして、冷たくなった父の周りに色とりどりの花を添えた。

棺を閉じるとき、もう父には会えないのだと実感して、シャーリーはハンカチで目頭を何度も押

さえる。

「シャーリー」

そばに寄り添ってくれる母と兄のぬくもりに支えられて、シャーリーはなんとか顔を上げることができた。

すべての行程を終えて屋敷に戻ると、王室からの遣いとしてやってきた宰相補佐官が待っていた。

エヴァンズ公爵家の応接室で、母と兄とともに宰相補佐官の言葉を賜^{たまわ}る。

「この度はご愁傷様です。ムーアクロフト王国の『星』を失い、私もまた深い悲しみに包まれております。では、国王陛下よりお預かりしましたお言葉をお伝えします」

宰相補佐官が代弁して伝えた国王陛下の言伝を、ありがたく頂戴する。

覚悟はしていたつもりだったけれど、やはり父を失った哀しみが深くシャーリーを落ち込ませた。

「……国王陛下からのお言葉は以上になります。続いて、ホレス様ご本人が遺した、星証書遺言をお伝えさせていただきます」

「父さんが星証書遺言を遺していたのですか……!?」

兄が驚いて立ち上がった。

星証書遺言とは、『星』を授与された者に与えられる特権で、遺言書に書かれていることは必ずその通りに実行するというものである。その内容がどんなものであれ、有効期限の一年間は国王陛下でも干渉することはできない。

（あの穏便で平和主義のお父様が星証書遺言を遺していたなんて……お兄様が驚くのも無理な

いわ)

何者にも干渉されることなく必ず果たされる星証書遺言は、故人の最期の願いを叶えるためのものだ。有効期限の一年以内に手続きすれば、愛人に遺産を渡したり、直系ではない後継者を指名したりすることも可能で、いわゆる法に則った相続を故人が拒む際に使われることが多い。家族関係が不仲である家がよく利用している印象だ。

だからこそ親愛の情が満ちていたエヴァンズ家の当主が、星証書遺言を遺すとは想定外の事態だった。

「デリック落ち着きなさい。ホレスの最期の遺志よ。たとえどんな内容であれ、私たちは受け止めなければならぬわ」

「……失礼、取り乱しました」

母と兄のやり取りを見ながら、シャーリーは緊張した面持ちで膝の上で拳を作った。

(お父様は星証書遺言を利用してまで……最期に何を望んだのかしら)

「では、開封させていただきます」

宰相補佐官は嚴重に封をされた羊皮紙を開く。一瞬、モノクルの奥の瞳が見開かれた気がした。

『『星』保持者ホレス・エヴァンズの名において、娘であるシャーリー・エヴァンズとロッド・ファーカーの婚姻を望む』

時が、止まったような錯覚に陥る。

婚姻？ 私が？ あのロッド・ファーカーと？

「……………えっ」

シャーリーの間の抜けた声が、静まり返った屋敷の中に溶けていった。

一章 幼馴染が絶倫色情魔になっていた

父の死を悲しむ間もないまま、結婚の準備は進められた。

本来慶事は喪が明けてから行われるべきとされているが、星証書遺言には即日結婚の記載があり、シャーリーは父の死後三日という異例の早さでファーカー公爵家に嫁ぐことになった。

もちろん結婚式を挙げてなどないし、お披露目のための祝宴会の予定もない。婚姻届にサインし、従者の手によって神殿に提出されただけだ。

シャーリーの心を置いてけぼりにしたまま、結婚の手続きは終わった。

ファーカー家に向かう馬車の中、シャーリーは重たいため息をつく。

（ファーカー家の人は、私が嫁いでくることを相当疎ましく思うでしょうね……）

魔力なしの使えない公爵令嬢。二十四歳という決して若くない年齢。さらには先代ファーカー公爵を医療ミスで殺めたと、訴訟裁判にまでなったエヴァンズ家の娘だ。

どう考えても歓迎されるはずがないことは明らかだった。

（ロッド……顔を見るのはいつぶりかしら）

同じ年のロッドは昔よく一緒に遊んだ、いわゆる幼馴染だ。

十歳のときにシャーリーに魔力がないと判明してからは疎遠になり、六年前に先代ファーカー公

爵が亡くなったことでロッドとは一切顔を合わせなくなった。

騎士家系であるファーカー家はエヴァンズ家と同じく五大公爵家の一つで、攻撃魔法を得意とする家門だ。騎士団を有することを許され、王家の矛盾としてムーアクロフト王国の発展、治安維持に大きく貢献している。

漆黒の髪に真紅の瞳。まるで蛇を彷彿とさせる鋭い眼光。

ロッドの放つ炎の攻撃魔法により、戦場は火の海と化す。ロッドは『ムーアクロフトの炎の大蛇』という異名を持っているらしい。

地位も名声も得たロッドは、この結婚に大いに不満を抱いていることだろう。本人同士の意思を全く無視した強制結婚なのだ。会ったらず、今回の件について謝罪をしなければ。

シャーリーは父の形見である懐中時計をポケットから取り出した。エヴァンズ公爵家の紋章が入った、精巧な作りをした銀細工の懐中時計をカチツと開く。

（お父様……どうして私をロッドに嫁がせたの……？）

自惚れでなければ、シャーリーはホレスに愛されていた。それなのに、最期に因縁の相手との結婚を強要させるなんて、父らしくない。

しばらくの間、シャーリーは一定のリズムで針を進める時計を無心で眺めて、ポケットに仕舞った。ファーカーの屋敷はすぐ目の前だ。

（星証書遺言の効力が切れるのは一年。一年なら頑張れるわ）

おそらく過酷になるであろうロッドとの結婚生活を覚悟して、シャーリーはタラップに足を掛

けた。

「シャーリー、御手を」

ふいに聞こえた耳心地のいい低音の声。

シャーリーが知る声より随分と低く落ち着いた声に、ハッと顔を上げた。

ルビーのような美しい瞳と目が合う。子どもの頃は蛇のような鋭い目つきだと言われていたけれど、今ではミステリアスな色香をまとっていた。

「ロッド……」

思わずドキドキと胸が高鳴った。久しぶりに対面したロッドは落ち着きのある大人な男性になっていたから。

シャーリーは差し出された手を掴み、地面に足をつけた。

まさか、ロッド本人が出迎えてくれるなんて思っていなかった。

剣だこのあるゴツゴツとした手は大きくて、シャーリーの小さな手をすっぽりと覆ってしまうほどだ。背も頭一つ分以上高い。公爵家の当主たる華やかな貴族服の上からも、鍛え上げられた体軀であることがよくわかる。

何もかもが子どもるときとは違う。記憶にあるロッドとの違いを改めて実感した。

「……行くぞ」

すぐに手を離され、ロッドはさっさと玄関ホールへ向かった。エスコートはない。

(手を貸してくれたのはただの気まぐれ……かしら)

そうだとにしても、一瞬でも気遣いを見せてくれたことは嬉しい。

シャーリーは広くてたくましい背中を見ながら、公爵家に入った。侍女長と家令を紹介されたあと、すぐに部屋へ案内される。

ファーカー家の使用人たちは礼儀正しくシャーリーに頭を下げているが、その目には嫌悪感がありと滲んでいた。

確かにシャーリーは魔力を持つてはいないけれど、公爵令嬢としての矜持は捨てていない。エヴァンズ公爵家の長女として、恥ずべきことは何もないのだ。

シャーリーは背筋を伸ばし、胸を張って悠々と屋敷の中を歩く。

さすがは騎士を輩出するファーカー家、鎧像やレプリカの武器が廊下のあちこちに飾られている。華美さよりも耐久性を重視した無骨な城のような屋敷だけれど、細部まで掃除が行き届いており清潔感があった。

あまりにも物々しい雰囲気、少しくらい花瓶を置いて花を生けたらいいのに、と思ってしまう。「義母は外出中で留守にしている。先に部屋に案内する」

義理とはいえ息子の妻が嫁いでくる日とわかっていて家を空けるとは……

案の定、歓迎されていない事実、シャーリーは息をつく。

そうして案内されたのは客室だった。日当たりがよく、寝室とダイニングの他に浴室もあり、この部屋だけで生活できる環境が整っていた。調度品に飾り気はないものの、高級な素材でできているものばかり。

ファーカ―家からの最低限の礼儀は感じられた。

「あまりにも急だったから、何も用意が整ってなくて申し訳ない。必要なものがあれば使用人に言ってくれ」

「ありがとう、ロッド」

冷遇されるのは覚悟の上だったけれど、思ったよりも待遇は悪くない。

最悪、屋根裏部屋や使用人部屋に入れられることも覚悟していた。疑ってしまったことが申し訳なくて、居た堪れなくなる。

シャーリーはさつさと退室しようとするロッドを呼び止めた。

「ロッド……あの、久しぶり。あと、ごめんなさい。こんな形で不本意な結婚を強いることになってしまつて……。ロッドにも好きな人とか、婚約を考えてる人がいただろうし、本当に申し訳なく思つてゐるわ。でも、約束する。一年経ったらすぐに離婚を——」

「俺のことはいいから」

ロッドはシャーリーの言葉を遮り、ペールブラウンの髪をくしゃくしゃに掻き回した。それも思いつきり。

「わ!? ちよつ、ロッド、突然何……!?!」

腰まで伸びる長い髪が乱れて、視界が閉ざされる。せつかくセットしてきたのに、頭が鳥の巢のようになつてしまつた。

「ホレスのおっさんのことは残念だった。彼は……本当に素晴らしい人だった。お悔やみ申し上

げる」

ロッドの静かな声に、思いがけず涙がほろりとこぼれ落ちた。

「……つ」

「こんな状況じゃあ、泣く暇もなかっただろ? 今、しっかり泣いておけ。しばらく人払いをしておくから」

そう言われて、シャーリーは父の埋葬後に一度も泣いていなかったことに気づいた。悲しむ間もなく、慌ただしく準備をして嫁いできたから。

およそ十四年ぶりに会うロッドの優しさに触れて、泣いていいんだという安心感とともに涙が滝のように溢れ出た。

扉が閉まる音が聞こえた。

ひとりきりの部屋の中に、シャーリーの嗚咽おえうが響く。

「お父、さま……つ、お父様……!」

ポケットから懐中時計を取り出して、大切に抱きしめる。

シャーリーたちはできることはすべてやった。

それでも今の医学では限界だった。助けられなかった。

だから父の死は受け入れて前に進まなくてはならない。偉大な父は天寿まことを全うしたのだ。

だけど、今だけ。

父の優しい微笑みを思い出して、父との大事な思い出を振り返って泣くのを許してほしい――

どれくらいの間泣いていたのか、気がついたときには窓の外が暗くなっていた。

「思いっきり泣いちゃったわ……」

腫れぼったい目を押さえながらシャーリーは起き上がる。落ち込んでばかりじゃられない。そろそろ誰か呼ばなくては。

最低限の身なりを整えて、扉の外をそうつと覗き込んだ。

すると、扉の目の前にアッシュブラウンの髪の男性が立っていた。燕尾服をきっちり着用した男性は、紫紺色の瞳でシャーリーを無感情のまま見つめている。

「わっつ!？」

まさか人がいるとは思わなくて、素っ頓狂な声が出た。

「シャーリー様、はじめまして。フィル・トンプソンと申します。シャーリー様の護衛と世話役を務めさせていただきます」

「あ……よろしく、ね……」

「必要なものはこちらにご用意しております。ではゆっくりとお寛ぎくださいませ」

フィルはワゴンを部屋の中に入れると、ぴしやりと扉を閉めた。

ワゴンの上には食事と湯浴みに使うタオルやバスローブ、寝衣が入っている。あとは自分でしてくれということなのだろう。

歓迎はされていない。でも、ひどく冷遇されるわけでもない。

(衣食住を与えてもらえているだけ、ありがたいと思わなくっちゃね)

シャーリーはぬるくなったスープをゆっくりと口に運んだ。

食事を済ませたあとはひとりで湯を張り、体を洗う。

初めてのことで戸惑いながらも、なんとか湯浴みを済ませた。今まで公爵令嬢として侍女がつねにそばについている生活だったから、慣れるまでに少し時間がかかりそうだ。

二十四歳のシャーリーは実家から出たことがない。けれど一年後ロッドと離婚したあとは、自活しなければならぬだろう。父の跡を継ぎエヴァンズ公爵となった兄も、いつかは妻を迎えて家庭を築く。いつまでも実家に居座るわけにもいかない。

ひとりで身の回りのことをする練習だと思ふと、悲しい気分が薄れて前向きになった。

そんなことを考えながら冷水を浸したタオルで腫れた目を冷やしていると、突然扉が開いた。

「えっ………ロッド?」

ガウン姿のロッドが酒瓶を抱えて入ってきた。そして、ソファアに座っていたシャーリーの横に腰を下ろす。

「えっと………どうしたの?」

「……」

なぜかロッドは無言で目も合わせてくれない。

ローテーブルに酒瓶をドンと置いて、額に手を置いて何かを考え込んでいる。

(何がしたいのか全く意味がわからないけど……)

ロッドは昔から口数が多いほうではなかった。今もその性格は変わっていないのだろう。ロッドから話し出すのを待つのをやめて、シャーリーは自分の言いたいことを言うことにした。「さつきフィルという男性が来てくれたわ。私に使用人をつけてくれてありがとう」「いや……」

「あとね、ロッドが知ってるかはわからないけど、私女医になって治療院で院長をしているの。この屋敷から通える距離だし、引き続き働いてもいい？」

「シャーリーに公爵夫人としての役割は求めない。屋敷の内政も義母が管理しているから、シャーリーは好きにするといい。ただ、外に出るときは必ずフィルを連れていけ」

「わかったわ、ありがとう」

心配していた治療院での仕事をあつさりとして承してもらえて安堵する。離婚したあとのことを考えて、仕事はできるだけ辞めたくない。

あと、これだけはロッドに伝えておきたい。

「一年後に離婚するまでの間、私にできることはさせて。例えば……騎士たちの怪我の手当とか。私は回復魔法が使えないから、一般の医師と同じ治療しかできないけれど、ロッドにたくさん迷惑をかけたからには、これくらいは罪滅ぼし——」

「迷惑じゃない」

ようやく、真紅の瞳と目が合った。その瞬間大きく心臓が音を立てる。

昔の淡い初恋を思い出して、胸が切なく軋^{きし}んだ。

「ふふっ……ロッドは大人になって丸くなったわね。昔と大違いだわ。そんな気遣いもできるようになったのね」

形だけとはいえ強制的に結婚させられるなんて、迷惑でしかないはずだ。

ロッドには婚約者はいないが、想い人もしくは婚約を考えていた女性がいただろう。離婚前提とはいえ、一年間も無駄な時間を過ごさせてしまうことになる。

でも慰めでもそう言ってくれるなんて、ロッドは子どもの頃から相変わず優しい。

ふと、大きな手が頬に添えられた。

武骨な指が目尻をなぞる。号泣した痕跡が残っていたのだろう。

ロッドに弱っているところを見られてしまつて気恥ずかしい。

「一応冷やしたんだけど、まだ腫れていたかしら？」

シャーリーが訊^きねても、ロッドは無言のまま、じつと見つめてくる。

夜中に寝室にふたりきりという状況のせいか、なんだか落ち着かなくなつて、シャーリーはそつと視線を下げた。

「ああ、やっぱり酒がないと無理だ……!」

突然そう言つて立ち上がったロッドは、酒を一気に呷^{あむ}つた。

ゴクッ、ゴクッと喉仏が大きく上下する。

「えっ、これ蒸留酒の原液よ!? そんな一気に飲んだら急性アルコール中毒になつてしまうわ!!」

シャーリーは慌てて酒瓶を取り上げた。しかし、もうすでに半分以上はなくなつてしまつている。

「シャーリー」

「なっ、ロッド、何をするの、下ろして！」

ロッドはシャーリーをまるで米俵を運ぶように肩に担ぐと、ベッドに投げ込まれた。酔うと暴れる性質なのだろうか？ ロッドの奇行の意味がわからない。

桃花色の目を吊り上げてロッドを睨むと、太い腕に囲まれる。

「なあ、忘れていないか？ 今夜は初夜だ」

その言葉に、全身が石のように固まった。

初夜？ 形だけの強制結婚なのに？ 愛し合っているわけでもないのに？ 世継ぎを作る義務もないのに？

シャーリーが面食らった一瞬の間にガウンを剥ぎ取られ、寝衣を引き裂かれた。

「いやっ、やめて！ こんな強姦と同じだわ……！」

「何を言っている。シャーリーは俺の妻だ。たとえ書類上だけだとしても」

「でも——」

「逃げなければ逃げればいい。ただし、俺から逃げられるのならな」

ロッドの切れ長の目がシャーリーを見下ろす。それは獲物を捕食する蛇の目そのものだっただ。

（怒ってる……？ そりゃそうよね）

ロッドの貴重な一年間をシャーリーが奪ってしまったのだから。シャーリーが計画したことではないとはいえ、父の責任は娘が負わなければならない。

なんとかかこの体勢から抜け出して話をしようと体を振った瞬間、熱波が肌に当たりシャーリーは固まった。

ロッドは炎の攻撃魔法の使い手だ。魔力なしの貧弱な女がどう抗ったところで敵うわけない。

「ロッド……あっ」

顎を掴まれ、口づけられる。

シャーリーはきつく唇を閉ざした。ロッドの唾液が体内に入ると大変なことになってしまうから。

「シャーリー、飲めよ」

「んんっ、あう……っ！」

無理やり指で唇をこじ開けられ、その隙間に舌を差し込まれる。

ふわりと酒精の味がする。ロッドの唾液が送り込まれた途端、シャーリーの体は芯から熱く燃え上がった。

魔力を持たない人間が、魔力を持つ人間の体液を体の中に取り込むと催淫状態になってしまう——そのことは知識としては知っていた。けれどこんなに理性が溶けるなんて想定外だった。なにせ、シャーリーにとって初めてのキスなのだ。

全身が熱くて汗が噴き上がる。頭の中が霞がかって、ぼうつとしてしまう。

「もうエロい顔して……シャーリーがこないやらしい女に成長してとは思わなかったな」

「あっ、やあ……！」

胸当てを押し上げられ、豊かな双丘が揺れる。

お椀型の膨らみを揉まれて、淫らに形が歪む。体の中心部が熱く疼いた。

「こっちも……子どものときより成長したな」

「そ、そりゃあ、もうお互い二十四歳だもの……っ」

「確かにそうだな。あの頃よりも……もっと綺麗になった」

「やあつ、ロッド、まっ、て」

胸の蕾をピンと弾かれて、体が跳ねた。

ロッドは指先で先端をいじりながら、シャーリーの首筋に何度も唇を這わせた。時折きつく吸い上げられ、チクリと痛みを与えられる。

「シャーリー」

熱のこもった声で名前を呼ばれて、シャーリーはロッドの顔を見た。

漆黒の前髪の隙間から覗く鋭い目、すっと伸びた鼻梁。形のいい綺麗な唇がどんどん近づいてくる。

「だ、だめ……！」

「どうして」

「お、お酒くさいし！ それに、そもそもロッドとこういうこと——」

「こんなの、酔わずにできると思うか？」

「なら、しなきゃいいでしょっ」

反論するも、再び指を口に突っ込まれる。思い切り歯を立てたけれど、ロッドに効果はなかった。

無理やり開けられた隙間から、魔力が溶け込んだ唾液を流し込まれて、また一段と体が熱くなる。

「はあつ、はあつ、はあ……」

息が上がる。体が熱い。真紅の瞳を見つめていると、そのまま吸い込まれそうになる。

「シャーリーは俺の妻だ。諦める」

「……っ」

ロッドがどうしてこんなことをするのかわからない。

ただ女を抱きたいから？

魔力なしの女を抱くのは楽しいと、魔力を持つ貴族男性が言っていたのを聞いたことがある。魔力持ちの男性向けに、魔力を持たない娼婦だけを集めた高級娼館もあるくらいなのだ。

ロッドも魔力なしの女を抱きたいだけなのかもしれない。それに加えて、この結婚に対する苛立ちをシャーリーにぶつきたいのだ。

（でも、今回の強制結婚でロッドに多大な迷惑をかけたのは事実なわけで……）

シャーリーは全身の力を抜いた。ロッドが怒るのは当然だと思っし、これで気が済むのなら致し方ないと思ったのだ。

また、ロッドが顔を近づけてくる。

今度は抵抗しなかった。目を閉じて、荒々しい口づけを受け入れる。

ぬるりと肉厚な舌が入り込んできて、シャーリーも積極的にそれと絡め合った。

「んっ」

シャーリーが舌の根元をくすぐるように舌尖を動かすと、ロッドの体がピクリと跳ねた。
(もう、なるようになればいいわ)

わずかに酒精の香りが鼻から抜けていく。ロッドの魔力に酔わされてか、くらくらとする。
(キスって……気持ちいいのね)

酩酊としたなか、いつの日か諦め、押し込めた初恋が沸々と蘇る。

魔力なしの自分では、ロッドと結婚できない。

ほとんどの貴族が魔力持ちであるなか、魔力なしは厭われる。だから諦めた。現実を受け入れて、公爵令嬢としての未来を諦めて、女医として生きていく覚悟を決めた。

そのはずなのに、ロッドの口づけ一つで何年間もかけて築いた決心が揺らいでいく。

——どうせ、一年だけの結婚だもの。

未来のない愚かな選択だという自覚はあったけれど、それでもいいと思えた。ロッドの腕の中にいるこの瞬間だけでも、ぬくもりを感じていたい。

ロッドの魔力がどんどん体内に溶けていき、シャーリーの思考を奪っていく。

唇が離れて、透明な糸がふたりを繋ぐ。

「はあ、はあ……」

至近距離で見つめ合ったまま、ロッドは下穿きの上から割れ目を撫でた。くちゅうりと粘着質な音が聞こえる。

「シャーリー聞こえるか？ もうこんなに濡れてる」

「だ、って……」

「もしかして、こういうことするの初めてではないか？」

シャーリーは小さく首を横に振った。

魔力は持たないけれど、蝶よ花よと大事に育てられた公爵令嬢なのだ。今まで恋人がいたことすらない。

「……根が真面目なところは昔から変わってないんだな。二十四歳になってまで律儀に処女を守るとか」

「だって、恋愛する暇もなかったんだもの……」

「そういうところ、シャーリーらしいな」

下着をずらされ、濡れそぼった蜜口を撫でられる。指の動きに合わせて淫らな音が聞こえて、自分がいかに感じているかを知らされる。

「ロッドこそ……こういうことするの、好きなの？」

「こういうこと？」

「女性と……その、性的な触れ合いをするの……」

「ああ、そうだな。……感じて乱れているシャーリーを見るのは好きだな」

「——あッ」

指が挿れられる。初めて異物を膣内に受け入れる感覚に、ぞくぞくした。

普段から剣を握るロッドの指は太くてゴツゴツしていて、それにぐりとかき混ぜられ、ほぐす

ように何度も中を擦られると、上擦った声が漏れてしまう。

甘美な刺激に体が蕩かされて、目尻がとろんと下がっていく。

そんなシャーリーの痴態を、ロッドは愉しそうに見つめていた。

「見な、いで……」

「なぜ？ もっと乱れろよ」

「ああ……っ！」

二本目の指を挿入されて、感じる場所を探るように動かされる。

ロッドの指先がある場所を掠めると、体が勝手にのけ反った。

「ここか、シャーリーの悦いところ」

「ひいッ、ああ……！」

「あ、シャーリーが、俺でこんなに感じているなんて……」

ロッドの指が執拗にシャーリーの弱い場所を攻める。蜜口から愛液が溢れて、ロッドの手を濡らしていく。絶妙な力加減でトントンと刺激され、思わず腰をくねらせた。

それだけでもわけがわからなくなるくらい気持ちいいのに、硬く勃起上がった胸の頂に吸い付かれ、甘噛みまでされる。

同時に二か所の性感帯を暴かれて、大きな快楽の波が押し寄せてきた。

「やつ、ロ、ド、はげし……っ、だめえ……！」

胸に顔を埋めるロッドの頭を抱えて、シャーリーは必死に体を振らせた。快感を逃がそうとして

も逃げられなくて、どんどん高みに上っていく。

割れ目の上にある小さな粒をぐりつとすり潰された瞬間、目の前がチカチカと閃光した。

「ああ………ッ!!」

シャーリーの体がびくくんと痙攣する。ロッドの頭を抱きしめる腕に力が入り、思いがけず胸を彼の顔に押し付けてしまった。

全身を駆け巡る甘美な痺れを受け止めたあと、ゆっくりと体が弛緩する。

「——っ、はあっ、窒息するかと思った」

「あ、はあ、ごめ……ごめん……っ？」

慌てて腕の力を緩めると、欲情の色に染まった瞳と目が合う。

「気持ちよかった？」

そう問われても素直によかったとは言えなくて、シャーリーはふいと顔を逸らす。

そんな態度を気に留める様子もなく、ロッドは震えているシャーリーの体を撫でながら下着を剥ぎ取った。

「シャーリー……」

ロッドは艶やかな声で名を呼びながら、ガウンを脱いで下穿きから怒張を取り出した。昂った屹立は筋を立てて勃起上がり、先端からは透明な雫が滴っている。

医師として、男性器を見たことはある。ロッドのそれも同じ生殖器なのに、まるで凶器のような凶暴なモノにしか思えない。

「お、おつきすぎない……？」

思わず正直な感想をこぼすと、ロッドはハッと鼻で笑った。

「なんだそれ。褒め言葉か？」

「ぜんぜん褒めてないわ……」

「大丈夫。最初は少し痛いかもしれないけど、すぐに慣れる」

そう言いながら、ロッドは濡れたあわいに雄の先端を押し当てた。その熱さと硬さにぞくつと体が震える。

挿入される瞬間、シャーリーは大事なことを思い出した。

「待って、避妊薬は……っ!?」

ムーアクロフト王国で流通している避妊薬は二種類あり、男性が服用する薬と女性が服用する薬がある。女性用のほうが値段も高く、避妊率がほんの少し下がってしまうことから、男性が避妊薬を飲むというのが一般的なマナーだ。

ロッドは不思議そうな顔をして、くふ、と先端を蜜口に入れる。

「結婚しているのに、どうして避妊薬が要る？」

「どうしてって、離婚するんだから、赤ちゃんができたら……ッ、あつ、入れないで、まつ、ああ……!」

膣壁を擦り上げながら、肉塊がどんどん奥に入ってくる。

体を振ろうとしても腰をがしりと掴まれていて、逃げようにも逃げられない。

「まつ、て、ロッド、おねがいっ、まつて……ひあああつ!」

シャーリーは必死に訴えるものの、ロッドは全く止まってくれない。

雄のすべてが中に埋まり、ふたりの腰が密着した。下腹部にすさまじい圧迫感を覚えて、脳の奥がチカチカする。

あんな凶大なモノが自分の中に入っているなんて信じられない。

シャーリーがそう思った途端、媚肉が屹立に絡みつく。雄の形を覚えるように腹の奥が疼いた。

「はあつ、シャーリーの中、うねって……締めつけてくる……」

ロッドは気持ちよさそうに顔を歪めながら、息を吐く。

「ばか……ああ……ひどい、さいていよ……」

確かに不本意な結婚を強いて、ロッドに迷惑をかけたのはシャーリーだ。

けれど避妊薬を飲まずに挿入するなんて、幼馴染がこんな最低限の礼儀に欠けた男に成長していたとは。

(こんなのためなのに……気持ちよくてたまらないなんて……)

魔力に酔わされて昂っている体は、浅ましくも雄に絡みつき、きゆうきゆうと搾り取ろうとする。強引に体を繋げてくるロッドを止めさせなければならぬのに、拒みきれない。

ロッドは涙目のシャーリーを見て、なぜか獷猛な笑みを浮かべた。

「孕めよ。俺の子を孕めばいい」

低い声で言うと、ロッドは猛然と腰を振り始めた。

抗いようのない淫らな愉悅に支配されたシャーリーは、揺さぶられて嬌声を上げることしかできない。

「あ、あ、あつ、あん……っ！」

「シャーリー……シャーリー……ッ！」

揺れる視界のなか、ロッドの端整なかんばせが切なそうに歪む。その表情に胸が締めつけられて、中を掻き回している屹立をぎゅうつと食い締めてしまう。

（ロッドの、ばか……！）

でも、本当の大馬鹿者は自分だ。罪悪感から彼を受け入れたのは自分自身。

この行為に意味なんてない。ただ快楽を貪るだけで、何も得るものはない。

頭ではわかっていても、再燃した初恋がシャーリーの理性をガリガリと削っていく。

（もうだめ……おかしくなっちゃう……）

シャーリーは快楽に耐えるように広い背中に手を回し、思いきり抱きついた。

すると、ピタリとロッドの動きが止まった。

「ふあつ、はあ、はあ、ロ、ロッド……？」

シャーリーが問いかけるけれど、ロッドは腰をくつつけたまま微動だにしない。愉悅に溺れていた中で突如行為が止まってしまい、子宮が切なく疼く。

でも、今はそれよりもロッドが心配だった。何かあったのかとロッドの顔を覗き込むと、真っ赤に染まっていた。

（もしかして、苦しいの？）

あんなに強い酒を一気飲みしていたのだ。急に体調が悪化してしまったのかもしれない。

シャーリーは熱を測るときみたいにロッドの前髪を掻き上げて、額に手を添えた。確かに熱いけれど、異常な発熱ではなさそうだ。

「だい、じょうぶ？」

「ああ……」

なんだかロッドが今にも泣き出してしまいそうに見えて、思わず頬を撫でる。

「ほんと？」

「シャーリー、さっきみたいに抱きついてほしい」

「え？ 急にどうしたの？」

「……頼む」

ロッドに何があったのかよくわからないけれど、彼がそれで落ち着くならと、シャーリーは言われた通りにたくましい体にしがみついた。手足を絡めると、筋肉で覆われた立派な体躯に包まれているようで安心する。

全身を密着させたことで、深いところに屹立が入り込む。

「ンッ……これでいい……あっ！」

中に埋まっていた屹立がさらに膨張したのがわかった。

（うそ、まだ大きくなるの……!?）

驚いて体が跳ねたことで、強烈な快感が駆け巡った。

肌が密着するのも、体を繋げるのも気持ちよくて——シャーリーは無意識のうちに腰を揺らしてしまっていた。

「腰、動いてる」

「ちが……っ、ロッドのがいきなり大きくなったから、びっくりして……！」

「シャーリーに求められたら、興奮するに決まってるだろう」

「なっ、求めてなんか——ああッ」

ロッドは逃がさないとばかりにシャーリーの腰を固定して、最奥を穿つ。

「シャーリー、もつと。もつと……！」

ギリギリまで腰を引き、奥を突き上げられる。どうやら子宮に近い場所に性感帯があるようだ。激しい動きに、寝台がギシギシと軋む。

今まで感じたことのない強烈な快楽を叩き込まれて、あつという間にシャーリーの頭が白く染まっていく。

「やあつ、あつ、まつ、そんっ、なあ……！」

本当にロッドは何を考えているのだろう。彼はこの強制結婚の腹いせにシャーリーを抱いているだけのはず……なのにもまるで本当の夫婦のように求め合っているような気がしてしまう。

恥ずかしい部分を曝け出して、粘膜を擦り合わせて、深いところで繋がって——ふたりは淫らな行為を繰り返す。

最も敏感な場所を何度も突き上げられて、ついに快感が弾けた。

「ああああ——……ッ！」

まるで高所から突き落とされたかのような浮遊感に襲われて、シャーリーは硬い背中に爪を立てた。全身が震えて、目の奥に火花が散る。

（これが、オーガズムなの……?）

性的興奮の頂点で起こる生理学的な現象のことをオーガズムということを知ってはいたけれど、こんなに甘美な感覚だったなんて。

しばらくして体の緊張が解けたときには、息も絶え絶えだった。

「俺を欲しがってイってるシャーリー、いやらしいな」

「ば、ばか……！ もう抱きついてあげないからっ」

「それは残念」

荒い吐息のまま慰められるようにキスされたけれど、そんなことで絆（ほた）されるほど単純ではない。（具合が悪くなったのかもって、心配して損した！）

「もう、いい加減に離して」

むっと唇を尖らすシャーリーを見下ろして、ロッドは口角を上げる。

「俺はまだイっていないんだが」

「し、知らないわよ……」

「こんな状態で離せるとでも？」

ぐるりと繋がったままの腰を回されて、オーガズムを覚えたばかりの体に火をつけられる。
「これ以上されたら、こ、壊れちゃうから……!」

必死に首を横に振ったけれど、ロッドに両手をシートに縫い付けられてしまう。
「壊れたら、俺が何度だって助けてやるよ」

「んんっ、んーっ!」

言い返す前に唇を塞がれ、舌が滑り込んでくる。

ロッドの魔力が流れてくると同時に、再び律動が開始された。一度深い快楽に溺れた体は、あつという間に絶頂の波に呑み込まれる。

(また、またすぐにキチャウ……!)

奥深くを抉られて、シャーリーは達してしまった。

「ンンンン——ッ!!」

気持ちよすぎて瞳に涙が滲むけれど、ロッドの動きは止まらない。

パンッ、パンッと腰がぶつかり合う音が響く。逃げることも止めることもできず、シャーリーは身を震わせてただ甘い愉悅を受け止めた。

「くっ……ッ!」

ロッドに腰を引き寄せられて、さらに奥へ奥へと腰を押し付けられた途端、シャーリーはまたすぐに達した。

(中に、出されてる……!)

熱い飛沫しぶきが流れ込む感覚に感じてしまう体はなんて淫らなんだろう。

これ以上感じたくないのに、魔力を含んだ精液は再びシャーリーの体を燃え上がらせる。何度もイカされて中にまで出されたのに、まだ雄を求めて体を熱くさせられる。

吐精をすべて受け止めたあと、ようやく唇を解放された。

「避妊も、せずに、出すなんて……ロッドが、こんな最低な人間だとは思わなかった……っ」

シャーリーが切れ切れにそう言うと、目尻に溜まった涙がこぼれ落ちた。受け入れたのは自分だけれど、せめて外に出すくらい配慮はしてほしかった。

すると再び中を穿たれて、「ひゃああ!」と情けない声が漏れる。

(どうして大きいままなの……!?)

男性は一度発散すると萎えるのではなかったのか。自分の知識とは違う状況にシャーリーは瞠目ぼうもくする。

「悪い、シャーリー。……全然おさまらない」

「やっ、どうして!? も、もう、おしまいっ!」

「無理だ」

そう言っつてロッドはシャーリーの両脚を持ち上げ、大きく開かせた。

叩きつけるように怒張を出し入れされるといういやらしい光景を目にして、眩暈めまいがしてくる。

「やっ、も、やめ……ッ……ッ!」

「シャーリーの中、悦すぎる……っ!」

ロッドは手加減なくシャーリーを貪った。

何度も体勢を変えて、後ろ、横、下、さまざまな角度から中を蹂躪し、精を吐き出す。

三回目に出された時点でシャーリーは確信した。ロッドは絶倫に成長してしまったのだと……

「おねが、い……せめて、きゅう、けいさせて……っ」

「無理だ、止められない」

「ひいつ、ああ……!」

激しい律動を受け止めながら、シャーリーは幼馴染の変貌に戦慄する。

(こんなロッド知らない……)

シャーリーと甘く呼ぶ声も、獐猛に嚙ういじわるな顔も、快楽に顔を歪ませる色っぽい表情も、シャーリーを蹂躪するたくましい体躯も、何もかも子どもときとは違っていて。

——心臓が破裂しそうなほど暴れているのは、魔力に酔わされたうえ激しく抱かれて、おかしくなってしまったから。そうに違いない。

空が白んできた頃、ようやく解放されてシャーリーは気絶するように意識を手放した。

* * *

ムーアクロフト王国の建国王であるムーアバフは、当時力を持っていた五つの公爵家に特別な能力を分け与えたと建国史に綴られている。

数百年が経った現在も、ムーアクロフト王国を支え続けている五つの公爵家はそれぞれ重要な要を任されていた。

そのことから、この五大公爵家間の均衡を保つことは非常に重要だとされている。

その一環として、五大公爵家の令息令嬢は幼い頃から交友会という場で、よく引き合わされた。

各家門の将来を担う子どもたちを小さい頃から交流を持たせることで、仲違いを起こさせないようにするためである。

シャーリーと年の近い子どもは何人かいて、いつも王城の庭園で追いかっこをしたりお菓子を食べたりして遊んでいた。

ロッドと初めて会ったのは五歳のときだ。

「はじめまして、よね？ あなた、お名前はなんて言うの？ 黒い髪に赤いおめめだから、ファー

カーのおうちの子？」

「……」

五大公爵家の交友会に初めてやってきたロッドに、シャーリーは興味津々だった。けれど、ロッドはむすっとした表情で全く返事をしない。

「そんな怖い顔しないで。お名前を教えてよ」

「……」

「あら？ もしかしてお名前がないの？ じゃあ私がつけてあげる！ ピッピー、なんてどう？ なんだかハッピーな気分になれそうじゃない？」

「……ロッド」

笑いながら一方的に話すシャーリーに、ロッドは鬱陶^{うつとう}しそうに答えた。

「ロッドね！ よろしく。私はシャーリーよ」

「……だっさいセンスのシャーリーな」

「まあ、そんなにピッピニーが気に入ったのなら、そう呼んでほしいと言えがいいのに！」

「ピッピニー……ふっ、だっさ」

「ねっ、可愛いでしょう！ 気に入った？」

「絶対こんな変な呼び方されたくない」

凝り固まったロッドの表情が一瞬柔らかくなって、シャーリーは幼心に嬉しく思った。

あとから両親に聞いて知ったのだけれど、ロッドは婚外子だった。

ファーカー公爵と夫人の間では子に恵まれず、公爵が平民出身の侍女に手を出して生まれたのがロッドだ。正式にファーカー家の子として迎えられたのを機に、この交友会に参加するようになったのだという。

「ねえねえ、シャーリーは知ってる？ 最近交友会に来るようになったファーカー家の男の子、母親は平民なんだって」

「うん。お父様から聞いたわ」

「平民の母親から生まれただなんて、わたくしたちとは格が違いわね」

「そうかしら？ あんまり何も思わないけれど」

「シャーリーは同じ年だから、あんまり仲良くしないほうがいいわよ。もしあんな男の子と婚約させられたら最悪だわ。わたくしも一歳上で年齢が近いから気をつけないうと」

五大公爵家の一つ、オマリー家のシエンナは、そう言ってロッドを嫌悪していた。

他の子どもたちもシエンナと同じような発言をしているのを耳にしたけれど、シャーリーは「ふうん、そうなんだ」程度で特に気に留めていなかった。

交友会でロッドはひとりで過ごしていることが多かったから、接点がなかったし、五歳のシャーリーはまだ高位貴族としての意識が薄く、シエンナたちの話の本質をわかっていなかったというのもある。

ロッドとの距離が縮まったのは八歳のときだった。

いつものように大人たちは会合に出席し、残された子どもたちは庭園で遊んでいた。

シャーリーはふと、ロッドの姿が見えなくなったことに気づく。あたりを探すと植木の裏に倒れていた。

「ロッド……!? 一体どうしたの……!」

ロッドの肌は青ざめて、全身が陸に打ち上げられた魚のように痙攣していた。呼吸も不規則で、意識もない。明らかに毒による中毒症状だった。

「誰か……っ!」

シャーリーは声を張り上げたけれど、近くに大人はいない。

父が毒は早く処置しないと手遅れになってしまうと、よく言っていた。大人を呼びに行っていたら絶対に間に合わない。

シャーリーは持ち歩いていた薬袋を取り出した。

「ロッドは私が助けるわ！」

父が持たせてくれた薬袋には、いざというときのためにたくさんの薬が入っている。

当時の宮廷医師長であつた父の教えで、どの薬がどんな効能があるか、どのように服用したらいいのかという知識は持っていた。

「解毒剤は……っ、これね」

シャーリーは薬袋の中身をひっくり返し、紫色の液体が入った薬瓶を手にとった。

植物性の毒であれば万能に効くという解毒剤だ。ロッドを襲った毒が植物由来のものかそうでないのかは、症状を見ても八歳のシャーリーにはわからない。

でも、何もしないよりは試したほうがいい。このままではロッドは死んでしまう。

「ロッド、解毒剤よ、飲んで！」

「……ッ」

ロッドの体は痙攣したままで、自力では薬を飲み込めなそうだ。

（こういうときどうしたらいいの……？ あ、そうだわ。この前お父様が……）

先月、家族で湖へ行つたとき、父が溺れていた人に人工呼吸をして救助をしていた出来事を思い出した。

口移しで薬を飲ませればいいのだと思いつたシャーリーは、躊躇^{ためら}いなく解毒剤を口に含んだ。
（に、にがiiiiいっ！）

舌の上に乗せただけで強烈な苦味を感じる。しかし、泣き言を言っている場合ではない。

ロッドの青ざめた唇に、シャーリーは口を押し付けた。

「う、ぐ……っ」

「——ッ」

解毒剤が苦かつたのだろう、ロッドに歯を立てられてシャーリーの唇が切れた。しかし諦めずに解毒剤を彼の口の中に入れて薬を飲ませる。

ロッドの喉が上下したのを確認したシャーリーは、唇を離して顔色を窺^{うかが}う。

「お願い、効いて……死なないで……っ！」

ロッドの臉がわずかに開く。けれど、顔色は真っ青のままで目は虚ろだ。

それを見た瞬間、桃花色の瞳からぶわりと涙が溢れた。

「ロッド、ロッド……」

医者^{いしや}の娘とはいえ、命が消えかかっている場面に遭遇するのは初めてのことだった。

さつきまで挨拶^{あいさつ}を交わしていた友人が突然死んでしまうなんて、子どものシャーリーには到底受け入れられなかった。

泣きじゃくりながら、ただ解毒剤が効くことを祈ることしかできない。

やがて痙攣がピタリと止まった。解毒剤が効いたのだとわかり、シャーリーは慌てて大人を呼び

に走った。

その後、改めて父に診てもらい、ロッドを蝕^{むし}んだ毒が完全に解毒できていたことがわかった。
「よく頑張ったな。シャーリーは自慢の娘だ」

すべては、父が万が一のときに備えて持たせてくれた薬のおかげだ。けれど、シャーリーがそれを使って迅速に処置したことで、ロッドの命を救ったのだ。

このとき、シャーリーは初めて人を救う医者になりたいという夢を抱いた。

（父のような医者になれば、大切な人の命を自分の手で助けられる！）

それから父の教えのもと、医学書を読み耽^ふるようになった。目標は父と同じ宮廷医師だ。

ロッドとの関係も、これを機に変化した。

シャーリーに助けられてから、彼は心を開くようになったのだ。

木登りをして降りられなくなったシャーリーを身を挺^びして受け止めてくれたり、蜂に襲われそうになったところを助けてくれたり、噴水の中に足を滑らせて落ちそうになったときも代わりにロッドが落ちてしまったり……

「何やってるんだよ。こんな何もないところでコケるな」

「えへへ、ごめんね、ロッド」

全身汚れて毎回親に叱られたけれど、ロッドが文句を言いながらも助けてくれるのが嬉しかった。こうして定期的に開催される交友会で、ふたりはいつも一緒に過ごすようになった。

シエンナや他の子どもたちには「ロッドと一緒に遊ぶなんて変な子」と言われたけれど、シャー

リーはドレスを褒め合って菓子を食べるよりも、ロッドのそばにいるほうが何倍も楽しかったのだ。

「シャーリーは医者を目指すのか？」

「うん。お父様と同じ宮廷医師になるの！ ロッドは騎士になるんでしょう？」

「多分な」

「じゃあ、将来ロッドが怪我したら、私が治してあげる！ 早く魔法が使えるようになりたいな」

「シャーリーに怪我させられる未来が容易に想像できるけどな」

「そ、そんなことないわ！ 私だって立派な淑女になるんだから」

シャーリーが頬を膨らませると、ロッドはいじわるな顔をしてくしゃりと笑う。

「シャーリーが淑女？ 無理だろ」

「そんなことないわ。私だってやるときはやるのよ」

「へえ、それは見ものだな」

「今に見ていて。そのうちびつくりさせるからっ！」

ロッドと憎まれ口を叩きながら笑い合ううちに、自然と惹かれていった。

口は悪いけれど根は優しく、いざというときはいつも守ってくれるロッドが大好きで――

シャーリーの初恋だった。

（将来はロッドのお嫁さんになりたいな）

同じ五大公爵家で、同年。家柄も年頃も釣り合う。

だから幼いシャーリーは、無邪気にロッドと結ばれる未来を夢見ていた。

そして十歳になったとき。

貴族籍を有する十歳の子どもは全員受けなければならない魔力判定の儀で、ふたりの関係は大きく変わった。

シャーリーに魔力がないことが判明したからだ。

「残念ながら、シャーリー・エヴァンズ嬢に魔力反応はありませんでした」

神官にそう告げられて、全身から血の気が引いていく。

先に魔力判定を受けて、魔力持ちだと判明したロッドの顔を見られなかった。

（魔力がない……貴族ならほとんどみんな魔力持ちなのに……私はエヴァンズ公爵家の娘なのに……）

なんで。どうして。

現実を受け止められない。

「まさか、シャーリーまで魔力なしなんてね。そりゃあわたくしたちと遊ばなくなるわけだわ。だって格が違うもの」

判定の儀を見にきていたシエンナやその取り巻きたちにクスクスと笑われて、鼻の奥がツンと痛くなる。

シャーリーは硬直したまま、その場に立ち尽くした。

（魔力がないなら……ロッドのお嫁さんになれない。お父様のように宮廷医師にもなれない）

目の前が真っ黒になる。

貴族で魔力なしの者は厭われる。出自を疑われ、魔力がないという理由だけで破門される人も多い。もちろん良家との結婚など絶対に不可能だ。

王家に次ぐ名家であるファーカー家が、そんな欠陥女との結婚を許すわけがない。

夢と初恋が、同時に散ってしまった瞬間だった。

「シャーリー……」

心配そうな顔をするロッドの顔を初めて見た。

シャーリーは必死に笑みを取り繕って、いつも通りにあっけらかんとしてみせる。

「あーあ、魔力ないって。残念。てつきりあると思ってただけだなあ。ロッドは魔力適性があつたんだよね、おめでどう！」

「……」

「これから頑張つてね。魔法の訓練は大変だと聞かし。……ロッドの怪我、私では治してあげられないから……気を、つけてね……」

いつもならいじわるを言ってくるはずなのに、何も言い返してこないのが余計に惨めだった。

このままではみっともなく泣き喚いてしまいそうになる。

「シャーリー、こちらへおいで」

両親はいつもと同じ優しい笑みを浮かべていた。不安そうな顔をするシャーリーに、大丈夫だと言わんばかりに頷いている。